OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

大津 歴博 だより

2007
No.65

第58回ミニ企画展

葛川明王院の懸仏

平成19年1月6日(土)～2月12日(月)

滋賀県指定文化財　不動三尊懸仏　応永2年(1395)銘　明王院

大津市歴史博物館

第58回ミニ企画展

葛川明王院の懸仏

■平成19年1月6日(土)～2月12日(月)

大津市北部、比良山系西側の安曇川沿いに位置する葛川。ここに、比叡山延暦寺の支院、明王院があります。

葛川と明王院は、平安時代に北嶺回峰行の祖、相応和尚（建立大師）によりひらかれました。相応は、円仁（慈覚大師）の弟子で、不動明王の信仰が厚く、比叡山内に不動明王を本尊とした無動寺（東塔無動寺谷明王堂）を建立したことで知られています。

相応は、比叡山の北方に紫雲がたなびくのをみて、生身の不動明王に出会うために比良山の西側に分け入りました。三の滝での修行中、不動明王を感じ、思わず抱きつこうとして滝に飛び込んだところ、カツラの木を抱いていました。そのカツラの木で感得の不動明王を彫り、安置したのが明王院となります。以後、比叡山の不動明王の霊地として知られるようになり、後にこれらの故事が、葛川夏安居などの行や太鼓廻しなどの行事につながっていきました。

このように天台の不動明王の聖地とみなされた明王院は、都と延暦寺近郊の行場として多くの参籠者が訪れました。参籠者は、行を行ったしるしとして「参籠札」を奉納しました。現在明王院には、四メートルもの大きさの元久元年（一二〇四）の銘があるものをはじめとして、五百本以上の参籠札が現存しています。また、不動明王の霊験にすがるべく奉納された懸仏も多くのこっています。大型で、造形的にも迫力のあるものが多く、滋賀県を代表する懸仏として著名なものです。

本展では、葛川明王院に伝わる懸仏の十一面全てと、明王院最古の大型参籠札を展示し、室町時代の不動明王信仰の様子を紹介します。

滋賀県指定文化財　不動三尊懸仏　応永13年（1406）銘

同　裏面

滋賀県指定文化財　宝塔懸仏　文安４年（1447）銘

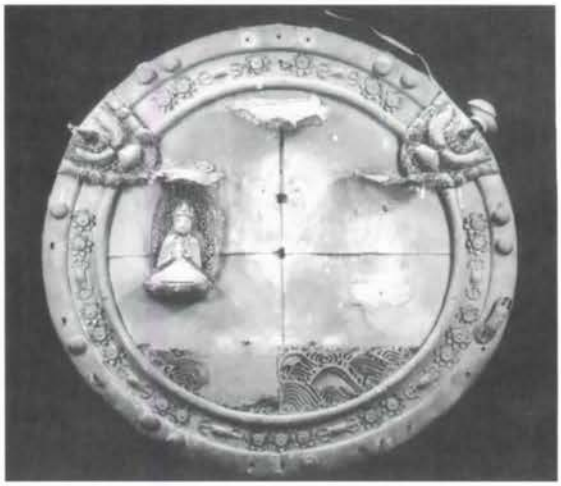
滋賀県指定文化財　不動三尊懸仏　明徳４年（1393）銘

滋賀県指定文化財　不動三尊懸仏　明徳３年（1392）銘

大津市指定文化財　三尊懸仏　室町時代

滋賀県指定文化財　不動三尊懸仏　応永３年（1396）銘

大津市指定文化財　三尊懸仏　明徳４年（1393）銘



大津市指定文化財　三尊懸仏　室町時代

新講座を続々開催！

◆ウィークデイ講座
◆歴博カード会員特別講座

昨年開館十五周年を迎え、本年度は従来とは異なる方法で講座や歴史教室を次々と開催し、本館の普及活動に新風を吹き込む努力をしました。この欄ではそれらの講座・歴史教室について報告します。

開館以来開催している土曜講座は、十二月現在で三六一回を数えました。毎年二四～二五回に及ぶ開催数は、他の関連機関に比べても非常に多いといえます。本館の事業としてすっかり定着している土曜講座ですが、土・日曜日は自治会など地域の活動に忙しく、平日に講座を開催してほしいという声もしばしば聞かれました。これに応えたのがウィークデイ講座です。初めてのウィークデイ講座は、館内での展示が難しく、講義を受けても図面やスライドではわかりにくく、現地で実物を見ながら説明を受けるのが最も理解しやすい、文化財建造物を見学する機会としました。

滋賀県文化財保護課主幹池野保氏を講師に迎え、平安時代の様式を伝える石山寺本堂と大津市の近世寺院建築を代表する西教寺本堂を二週にわたって見学し、教わらなければ見落としてしまうような様式や特徴についてそれぞれ詳細な解説をいただきました。両講座にはあわせて一九一名の方々が参加されました。

歴博カード会員特別講座は、カード会員に参加者を限定したまったく新しい試みです。これまで開かれた博物館として歴史や美術・考古・民俗に興味を持つ方々を対象に広く参加者を募ってきた土曜講座や歴史教室とは趣を変え、歴博の展示や講座で学びを深めていただいているカード会員を対象に、少人数でしか拝観・見学できない訪問先を訪れ、少し「濃い」体験をしていただこうと企画したのがこの講座です。本年度は国の保存修理事業として檜皮屋根の葺替え工事を進めている園城寺金堂の作業現場を、三班計七五名の方と訪れました。檜皮の葺替えは、条件によって異なりますが、三〇～四〇年に一度しか行われないもので、加えて大規模な国宝の建造物ですので、貴重な見学の機会を提供できたと考えています。

また、ふるさと大津歴史教室でも本年度から「ミニ」を開催しました。こちらについては、稿を改めて報告いたします。

歴史博物館では、今後も内容や開催方法にさまざまな工夫を凝らして講座・教室を開催する予定です。これからもよろしくお願いいたします。

臨時休館のお知らせ

歴史博物館では、大津市・志賀町の合併により、常設展示をリニューアルします。つきましては、左記のとおり、臨時休館いたします。ご迷惑をおかけしますがよろしくお願い申し上げます。

●二月十三日㈫～三月十三日㈫

但し、二月十三日㈫～二月二十日㈫は常設展示室のみ閉室し、企画展示室の催し物の観覧や、エントランスロビーのビデオコーナーなどは通常どおりご利用になれます。

＊リニューアルする常設展示では、展示室内に展示内容を紹介する大型モニターや町並み模型を解説するパソコンを設置するなど、各コーナーの展示内容も充実させます。よりわかりやすく、より見やすい展示となって再登場します。

＊常設展示のリニューアル詳細については、大津歴博だより次回号（№66）でお知らせします。

学芸員のノートから

『耀天記』に見える日吉社の御正体

『耀天記』は、山王神道の基本文献で、とくに「山王事」という長文は、本地垂迹説を考える上で重要視されてきました。『続群書類従第二輯』や『神道大系　日吉』に翻刻されており、図書館などで読むことができます。

ここで紹介する叡山文庫（別当代蔵）に納められている『耀天記』には、翻刻されている流布本に見られない記事があります。御正体（懸仏）に関する簡単な記事ですが、明治の神仏分離によって、日吉大社から仏教的な要素が失われてしまいましたから、往事を知るための貴重な手掛かりと言えます。

かつて日吉社境内にはたくさんの仏教的な施設があり、本殿下の下殿と呼ばれる空間には、本地仏が祀られていたとされています。山王は、神仏習合の代表例と言え、たくさんの懸仏が社殿にあったことは確かでしょう。

別当代本の記事は次のようなものです。

御正体礼拝講之事

日吉山王年中行事云、當社被掛御正体自リ公方事、勝定院殿義持公応永比礼拝講勤之時七社宝殿壱通宛御正体カヽル也、次二万松院殿義晴公天文年中礼拝講有之同一通宛七社宝前上ル、又次光源院殿義輝公弘治ノ比御仕勤ニテ又壱通七社二被掛、此以後ハ自公方無之故二今ハ其印斗也

又新礼拝講権輿伝記云、後堀河ノ御宇元仁元年慈円大僧正始被行之、私方此時神前ノ三面之御体ハ当社十禅師三宮両社ハ此時掛之歟畢

足利将軍の日吉社参は、応永元年（一三九四）の足利義満が有名です。その後歴代の将軍が社参し、時に礼拝講を修しました。この記事は、そうした礼拝講の折りに御正体が奉納されたことを記しています。足利義持の参社は、応永二十二年（一四一五）と二十八年（一四二一）で、どちらの時か分りませんが、日吉社の上七社本殿に御正体が懸けられたようです。

また足利義晴が礼拝講を行ったのは天文七年（一五三八）三月十二日、足利義輝が礼拝講を行ったのは永禄五年（一五六二）十一月十二日のことでしたが、こうした機会にも御正体が奉納されたと記しています。

将軍が主催する礼拝講の機会に奉納された御正体ですから、さぞ立派なものだったと想像されますが、元亀二年（一五七一）の山門焼討ちで焼失したと考えられます。

これに続く記事は、御正体が奉納されはじめた時期を、慈円が新礼拝講をはじめた頃ではないかと推測している文章です。

ではこの記事はいつ頃書かれたのでしょうか。将軍参詣の年代を「比（頃）」で表し、義輝に至っては弘治年間と書いていますが、実際はそれより後の永禄五年のことになります。焼討ちで全て無くなってしまい、年代を正確に語る術もなく、「今はその印ばかり也」と言っているのも、かつてのような御正体が見られないことを歎いているように読み取れます。つまり、復興直後の記事と考えられるのではないでしょうか。

別当代本のこの記事は、こうした文言から近世に入って書き加えられたと想像されます。『耀天記』は鎌倉期の成立ですが、このように、書写されるなかで、様々な記事が書き加えられる性格を持っていたのではないでしょうか。その経緯を明らかにすることは、容易ではありませんが、耀天記という本を考える上で重要な特徴に思われます。

（学芸員　和田光生）

収蔵品紹介 51

木曾海道六拾九次之内大津

「木曾海道六拾九次」は、歌川広重が天保六年（一八三五）から同十三年にかけて取り組んだとされるシリーズで、日本橋から大津までの中山道各宿が描かれている（ただし大津は本来中山道に含まれない）。

そのシリーズの中の大津宿。場面は、京都から逢坂峠を越えて宿場に入ったあたりの風景である。この通りは「八町通り」と呼ばれ、旅籠と本陣が軒を連ねるもっとも繁華な場所であった。この通りは今も琵琶湖に向かって下り坂になっているが、その様子が本図にも描かれている。坂道の両側、ずっと向こうまで、ぎっしりと並ぶ家並みが描かれ、荷物を積んだ牛車や行きかう旅人も、当時の賑わいを伝えている。また遠く琵琶湖上には帆かけ船、空を見上げれば雁の一団。近江八景の矢橋帰帆、堅田落雁を連想させようとしているのだろうか。

このような、描かれた風景や事物以外にも、本図の持つ情報は多岐に渡っている。それは、図中に見える「文字」の役割である。浮世絵師が作品中に様々な遊びや宣伝の要素を巧みに織り込んでいるのは有名な話だが、本図にもそれが見られる。向かって左側の旅籠の軒行灯に見える「大當」は、この作品のヒット祈願。もちろん「いせり」は版元伊勢利の宣伝。二階から吊られた看板に見える「山形に林の篆書体」は伊勢利の版元印、さらにその右手の吊看板には「新板」とあり、本図が新たに出版されたことを強調している。さらに遠望の瓢箪型看板には「大吉」の文字。右手の家並みに目をやる。右から二軒目の吊看板には、広重の広をカタカナにして組み合わせた有名な「ヒロ」印、さらに向こうには広重の「重」。

こういった文字を探すと、当時の洗練された広告センスが理解でき、微笑みたくなる。さらによく見ると、右手軒行灯の左右、旅籠入口に掛かる八枚の縦型の看板。これもれっきとした文字である。向かって左側から「広重」「大吉利」「続画」、さてその右は「木曾〇〇？」、そうなると行灯の右側もと目を凝らしてみると、右端が「板元〇〇」、その隣は「一立斎」だろうか。読めない〇印の箇所は御教示いただきたい。

浮世絵は、見る者を楽しませも苦しませもするので厄介である。

（本館学芸員　樋爪　修）

歌川広重　木曾海道六拾九次之内大津

大津市歴史博物館
〒520−0037　大津市御陵町２－２　☎(077)521−2100
ホームページ　http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp